

満鉄 中央試験所 大陸に夢をかけた男たち（七）

杉田望

第六章 残留科学者の戦後

大連市政府への移管

昭和二十三年の正月早々、その後の科学研究所にとつては、重要な役割を果たすことになる人物が丸沢常哉の前に姿を現す。李亜農りあのうという人物だった。李亜農を丸沢に引き合わせたのは、戦前調査部に在籍し、そのときは日僑勤労者組合の委員長を務めていた石堂清倫であった。

李亜農はかつて日本に留学、京都帝大仏文科在学中に共産党事件に連座し、投獄された経験を持つ共産党員だった。帰国後は陳毅將軍の指導する新四軍に参加、華中の建設大学長を務めていたときに国民党軍に追われ、教授団とともに大連に避難してきたという。

李亜農は洗練された日本語で、もの静かに自分の経歴を話した。李亜農の申し入れは、こういうことであった。

「戦乱から中国の美術品を守るために『博古堂』という骨董商店を営んでいます。ついこの間、関谷直司博士の案内で中央試験所を見学したのですが、その際、職員が生活に困窮しているという話を伺った。そこで、我々としては何とか援助できないものかと考えている。その問題について、関谷博士と協議して、その方策を考えたいと思うのですが、いかがなものでしょうか」

丸沢常哉は李亜農に好ましい印象を受けた。これは信頼に足り得る人物であるとも思った。

終戦三年目、大連鉄路局からの給与は途絶えがちである。李亜農の申し入れは願ってもないものだった。

ついでにしておく、関谷直司博士とは、のちに劇的な大連脱出を図るあの阿部良之助のことである。戦時中軍に関係した在連日本人の多くは、偽名を使っていたが、中央試験所の関係者で偽名を使ったのは、阿部良之助を除いて、他に例を知らない。

それはともかく、せっかくのありがたい申し入れである。丸沢は関谷博士こと阿部良之助と博古堂との共同事業計画の原案を練ることにした。

「科学研究所は博古堂の依頼により、毎月二千四百リットルの無水酒精と五十キロのDDTを生産して、博古堂に引き渡すこと。博古堂は生産に必要な設備改修資金、原料を提供すること。博古堂は生産量に正比例した金額を科学研究所に納付すること。生産に従事したものに對しては、生産量に比例して手当を博古堂が支給すること。手当に関する契約は日本人について丸沢常哉、中国人については廖華を代表者として、李亜農との間で契約を交わすこと。契約期間は三カ月として、協議の上契約期間を延長できる」

李亜農も丸沢常哉が示した原案に同意したので、これを科学研究所のフィリポフ管理官に示した。これで科学研究所の財政基盤ができるというのであれば、ということではフィリポフ管理官も原案に賛同した。

ところが日本人の間に異論が生じたのである。丸沢常哉は忍耐強く、職員たちの意見に耳を傾けた。異論の一つは、近く第二次帰還が始まりそうである、その際、生産に従事しているものは、強制的に留用されるのではないかという不安である。DDTの生産に関与したものが、その後、留用の憂き目にあつた経緯から考えれば、これはもつともな意見だった。もう一つは、阿部良之助に対する疑念である。阿部という人物は、どうにも信用のない人であつたようである。

「話がうますぎる、丸沢先生は阿部に騙されているのではないか」
などという議論も飛び出した。第一の疑問に對しては、李亜農・フィリポフ立会の上で帰還に際しては、生産に従事しているかどうかにかかわらず本人が希望すれば、帰還を妨げない、という言葉質を職員を前にして取ることと納得させた。第二の疑問に對しては、丸沢自身が全責任を負うことを約束することで無事に納まつた。丸沢はこのときも、実に粘り強く説得にあたつてゐる。

酒精とDDTの生産は、すでに経験をしているから慣れたものである。科学研究所のなかに生産委員会をおき、丸沢は生産業務に關して全責任を負うことになつた。設備の改修や技術的な問題も解決して、生産は順調に走り出し、科学研究所の収入は予想以上に増加した。丸沢の考え方からすれば、生産に従事しなかつた他の所員の生活のことも配慮しなければならぬのは当然だった。

そのために、たびたび会議を開き、配分案を検討した。結局、各人の生産に對する貢献の度合や生活の実態などを考慮して、全員に配分することに決した。また中国側關係者に對する配分は、廖華が孫毅文秘書に命じて適当に配分すること

にした。この措置が中国側の間で好感を呼んだようであった。

この年の四月、フィリポフ管理官はモスクワに帰任することになり、後任にはコザレフが任命された。このときの歡送会の記念であったのか、中央試験所本館前で写した写真が残されている。丸沢常哉はフィリポフ管理官と並び肩を狭めるようにして写っていた。

六月に入って、望郷の想いに駆られていた旧中央試験所所員に朗報が届いた。第二次帰還が間もなく始まるという知らせだった。ソ連側は、希望者の全員を帰還させるという方針だった。当時在連邦人の数は八千人。日僑勤労者組合が協力して、そのうち五千人が引き揚げていった。

科学研究所では田中泰夫、廣田鋼蔵、うちたじゅんいち内田潤一、坂本峻雄、くさかかずはる日下和治などの各博士、丸沢常哉に協力してソ連側との難しい交渉にあたった大形孝平なども帰還船に乗ることになった。残留していた研究者のうちで帰還船に乗ったのは、このとき五十人であった。

残留研究者は、丸沢常哉や萩原定司、石川三郎、阿部良之助など約三十名であった。中央試験所に残った三十名のうち、半数はソ連側の留用となり、また、半数は中国側の留用となった。丸沢常哉の場合はとくに李亜農の懇請で残留している。

博古堂との契約は順調だったが、このころになると、内戦で交通網は遮断され、原料の入手も困難となり、これまでと同様に生産を続けることができるかどうか、不安な状態になってきたのだ。そんなとき、博古堂の李亜農から丸沢常哉宛の手紙が届く。

「私は命により大連を去りますが、どうか日本人諸君は健康で愉快に工作してください」

と手紙にはあった。李亜農という人は、確かに日本人にとっては、科学研究所の経済上の基盤を作り、所員たちの生活の困難を救ったというだけでなく、あらゆる意味で恩人だった。丸沢は李亜農の突然の離連にショックを受け、いつときは呆然自失の状態にあった。その丸沢は李亜農に関して次のように書いている。

「例えば、喫茶店および日本料理店を経営して、私どもに憩いの場を提供し、日本人技術者を数名ずつのグループに分けて晩餐会に招待し懇談し、また高級科学者・技術者には専門のテーマで、報告文を提出させて数万円ずつの謝礼金を贈り、

あるいは博古堂の顧問を委嘱して毎月二、三万円の顧問料を支給するなど、枚挙にいとまがない」

丸沢常哉にとつては、中国人のなかでも数少ない信頼のできる人物であったようだ。このとき丸沢にしては珍しく、感傷的な言葉を吐いている。

一方、科学研究所においても、廖華は副管理官を辞任して、福建省の文教局の副部長に栄転していくことになった。廖華の去ったあと、副管理官に就任するのは王伊林^{おういりん}という人だった。

阿部良之助博士が突然脱走を図るのは、この年の九月のことであった。同じくこの年の十二月に入って、工業専門学校（後に大連工学院に改組）の校長を務めていた屈伯川^{くつはくせん}から科学研究所が、大連鉄路局から分離独立して、大連市政府の管理のもとにおかれることを通告される。

これよりさき、占領ソ連軍と大連市政府との間で、旧中央試験所の移管問題が極秘のうちに話し合われていたのだ。丸沢常哉は終戦以来のソ連管理官のやり口をみていて、科学研究所本来の使命たる研究機関に復帰するためには、鉄路局の管理を離れて、中国政府に移管することが唯一の路であると考えて幾度か意見を具申ししている。旧中央試験所の中国への移管を巡って、萩原定司は次のような秘話を話してくれたものだった。

「一九四八年末だったと思います。中国側は旧中央試験所をソ連側と交渉の末に、有償で買い取ることにしたのです。まあ、ソ連当局も魅力はあったのでしょうが、研究業務を再開するだけのゆとりがなかったのかもしれませんが、要するに、重荷になったので、中国に有償で譲ることにしたのだと思います」

移管の話は、コザレフ管理官にも詳細は知らされていなかったようである。丸沢常哉は多少の揶揄を込めて、そのときのコザレフ管理官のあわてぶりを、その著書のなかで書いている。移管業務が始まると、コザレフ管理官は中国人の労働者に命じて、麻袋に多数の図書類を詰めさせ、大連鉄路局の管理のもとにあった大連図書館に搬出させた。

そのなかには、初刊から完全に揃っていた日本の特許明細書、終戦後文献整備委員会で萩原定司が主任となって整理した未発表の報告書、抄録などすべてが含まれていた。

ソ連の管理下にあった時代、顧問を務めていたセツシツヒが旧中央試験所の資

料を米国領事館に持ち込むという事件があった。それでセツシツヒは科学研究所顧問を解任されることになるのだが、それが「スパイ事件」に発展することになる。萩原定司はそういう事件が起こることを予期して、所内から資料類を持ち出す場合、誰であろうと、必ず署名捺印を求めた。コザレフ管理官が書類を持ち出したこのときも、萩原はコザレフにサインを求めている。このあたりの厳密さは、丸沢常哉の指導によるものでもあるけれど、それが萩原定司を救うことになる。その文書はまた、のちに科学研究所がソ連側から研究資料を取り戻す際に重要な証拠書類ともなるのだ。

報告を受けた丸沢常哉は、科学研究所の新しい管理者に就任した屈伯川に資料持ち出しの事実を通報し、搬出を拒絶するように主張した。研究業務を再開するうえで、資料や研究報告書は貴重であり、どうしても所内に残しておかなければならない、と判断したからであった。だが、屈伯川はどういうわけか、これを黙認した。どうやら、中ソ関係は第三者が考える以上に複雑だったようだ。

移管業務が完全に終了するのは、昭和二十四年二月初めのことであった。科学研究所が中国政府に移管されると、大連工學院の院長を務めていた屈伯川が科学研究所の所長を兼務することになった。このころから工業学校を卒業した若い青年が二十名ほど、新たに科学研究所に採用される。

若い学徒を丸沢常哉は教育者としての暖かい目で、よく観察している。彼らに丸沢は中国の将来の希望を見た。確かに彼らは専門知識はなかったが、勉強熱心だったし、何よりも学ぶことに貪欲だった。

このとき、中国政府は科学研究所の研究業務再開を本気で考えるようになったようである。中国人研究者を本格的に採用する。最初に採用されたのは、台湾出身の蘇子衡という人で、宋明という仮名で入ってきた。彼は日本の東北大学工学部化学工業科の卒業生という。よく聞いてみると蘇子衡は丸沢の九州帝大教授時代の弟子西沢恭助博士の教え子ということだ。丸沢にすれば、孫弟子ということになる。

そして、ドイツに六年間留学し、博士の学位を持つ張大煌が副所長として赴任してくる。

移管直後に入所した主な中国人研究者を列挙すれば、窯業専門の王維章、語学に堪能な常伯華、熊本高等工業卒の董万堂、郭沫若の息子で京都帝国大学工学部

化学科卒の郭和夫、京都高等工芸学校卒の張綬慶などが相前後して入所してきた。このうち蘇子衡は、のちに中国科学院石油研究所に転出し、そこで所長を務めることになる。また、郭和夫は今でも大連化学物理研究所の副所長を務めている。この時期、確かに多彩な顔ぶれが科学研究所に揃った。窯業専門の王維章は筋がね入りの共産党員で、科学研究所の党書記として辣腕らっわんを振るい、また、語学の才に長けた常伯華は萩原定司と協力して、戦争のために欠号となった学術雑誌の収集や学術書の購入に努力して成果をあげた。

最後に残留した十名の科学者

昭和二十四年の四月、工学院と医学院が統合されて、新たに大連大学が発足したのにもなって、科学研究所は大連大学の付属研究機関として吸収される。ここでようやく、本来の使命である研究活動を始めようとの気運が盛り上がった。きた。

この年、第三次日本人帰還が始まる。この機会を逃しては、いつ日本に帰れるかわからない。残留者の誰もが、帰還を希望した。留用科学者のほとんどは、中国側が管理する科学研究所の職員となっていたが、他の機関では一、二の例外を除いて、すべて帰国することになっていた。

だが、科学研究所だけは、そういうわけにはいかないというのだ。屈伯川が丸沢常哉に三十名のうちから十名を選んで欲しいと、留用仕事を依頼してきたのである。

丸沢は困惑した。この場合も率先垂範ということで、丸沢はまず自分自身の残留を決めた。それでも、留用工作は難航した。結果をいえば、丸沢常哉を含めて、十名の高級技術者が残留に同意した。これまで二回帰還のチャンスがあった。彼らはそれを逃し、今度も帰還船に乗ることを諦めた。

これが、本当の最後になるかもしれないのだ。丸沢常哉の場合だと内地に家族を残していた。大変な決意を要する選択であった。だが、旧満鉄中央試験所の科学者のうち十人の男が残留を決意した。

関 皓之（窯業）

内藤伝一（無機化学・分析）

井爪清一（農産化学）

久我敏郎（皮革）

小田憲三（燃料）

片岡三郎（燃料）

萩原定司（資料室）

大竹良平（金属）

高村泰文（農産化学）

終戦の困難に耐え、中央試験所を支えてきた人々である。彼らは同志的に堅く結合していた。丸沢常哉を補佐してきた六所文三も去ることになった。根岸良二、奥野源次郎、井上政兼、中村武彦、佐久間滋、石川三郎などの名前も乗船名簿に記載されていた。

七月、第三次帰還船は二十名の中央試験所の研究者たちを乗せ、静かに大連の波止場を離れていった。

残留者たちは大連港の埠頭に立ち、いつまでも手を振って別れを惜しんだものだった。

このとき、終戦から四年近くが経過していた。今度の帰還を逃せば、内地の家族と再会する機会を永遠に失うことになるかもしれないのだ。人情からいえば、誰しも帰還船に乗りたいたいと思っただけに違いない。

こうして、十人の日本人科学者は大連に残った。中国側は引き続き残留して経済建設に協力してくれるよう、誠意をつくして留用を要請した。留用工作は大変強引であったともいう。それもあつた。

だが、丸沢を含め、満鉄の科学者たちは中国側の引き留め工作に抗しきれずに残ったのではない。在留を決めたのは、自らの意志であつたという。では、なぜ彼らは残留を決めたのか。その理由を、残留者の一人である萩原定司はこう話している。

「このとき丸沢先生はすでに残留を決意されていたのです。先生は七十に手の届く年齢となられていたのです。その先生が残留を決意されたというのに、先生を残して帰ることはできません。まあ、個人の立場でいえば、帰国して自分の研究を継続させることにも、確かに未練はありましたが、やはり先生に魅かれたのですね。先生は日本人として、戦争責任というものを感じていたようです。新しい中国に何かお役に立てないか、それを真剣に考えていたようです。私も先生の考

えに刺激されるところがありましたね」

旧中央試験所についていえば、国共内戦の混乱も終止符をうち、終戦から中断を余儀なくされていた研究業務がようやく、再開されようとしていたのだ。それを見捨てて、帰るわけにはいかないと丸沢常哉は思ったのかもしれない。このとき丸沢は六十六歳になっていた。この歳になれば、人生の最後をみすえながら隠居生活に入るのが、世間の人の生き方である。だが、丸沢は残留を決意、中国の経済復興に協力する意志を固めたのだ。

第三次帰還船に乗った石川三郎は、残留を決意した丸沢常哉の心の内を、こんなふうに見ている。

「船長は最後に降りる。キャプテン・ラストの思想なんです。丸沢常哉先生はまことに責任感の強い人で、中央試験所の職員が一人でも大陸に残っているかぎり、自分は残る、そういう人だったのです」

第三次帰還直後、中国では毛沢東の解放軍部隊が相次いで主要都市を陥落させ、いよいよ全国解放が目の前に迫っていた。東北についていえば、すでに昭和二十三（一九四八）年末、吉林、ハルビン、長春、瀋陽、撫順、安東などが解放され、寸断されていた大連までの鉄道も開通し、物資の流通も可能となっていた。

そうした共産軍勝利の気分は、大連の街にも伝わってきていた。昭和二十四年四月、それまで非公然だった共産党は公然と名乗り上げ、大連広場には中国共産党大連委員会の看板が掲げられた。欧陽欽が大連の党書記に就任して、旅大地区の最高指導者の地位につき、いよいよ大連は共産党が指導する新しい街に変身を遂げようとしていた。

この時期、毛沢東は延安で、「人民民主専制を論ず」という論文を発表している。丸沢常哉は同僚と一緒にこの論文を読み、中国がどのような方向に歩もうとしているのかを、必死で読み取るうとしていた。

「これからは経済復興だ」

というのが、全国で叫ばれたスローガンであり、街のいたるところに「生産提高・培養幹部」という八文字が張り出されていた。このころから、科学研究所にも中国人の少壮ジュニアの科学者が陸續と入所してきた。ここによく終戦以来断絶していた研究業務がスタートを切ることになるのである。

中国側は日本人技術者を尊重し、身分や賃金などすべての面で細かな配慮を行

った。張大煌副所長が燃料研究室の主任を兼務した例外を除き、彼らのほとんどは「主任」の肩書が与えられ、賃金でも研究者としては、最高の俸給が支払われた。例えば、萩原定司は資料室主任、内藤伝一は無機化学主任、窯業研究主任には関皓之が任命されているという具合である。

中国でいう主任とは、研究室の人事権、予算や研究計画を立てる権限など、研究業務に関しては広範囲な権限が与えられる職制であった。

このとき、丸沢常哉は科学研究所の顧問の肩書を与えられ、研究テーマの選択や研究計画の立案などで、屈伯川所長や張大煌副所長に助言を与えることを任務とされた。

研究業務を再開した科学研究所

研究業務が再開して、日本人の技術者たちが最初に取り組んだ大きな仕事は、工業博覧会を支援することだった。

昭和二十四（一九四九）年十月、北京に新しい政権が誕生して、中国は解放の喜びに燃えていた。大連では記念事業として、工業博覧会を開催する計画を立て、大連の大広場が会場として設営されることになった。要するに、大連は立派に経済復興ができた、ということを全国に宣伝するのが、博覧会開催の政治的目的でもあったのだ。

同時に日本人の技術者たちは、この共同作業を通じて、中国革命の何たるかを、実感させられる。それは感動的なものであったらしい。丸沢常哉はこのときの印象を次のように書き残している。

「この準備作業に対しては、留用された日本人技術者の功績は、高く評価されるべきである。しかし、復興の最大要因は中国人労働者の『翻身』であったと確信する。日本の統治時代に彼らは苦力として酷使され、なにことも『没法子』と諦めて働き続けてきたのであるが、終戦直後旅大地区に組織された中国総工会の幹部は鋭意熱心、彼らを指導し学習に努め、労働者としての自覚と誇りを体得させて、組織の偉力を認識させた」

中国共産党のやり方は「説得と学習」にあることを、丸沢常哉たち日本人技術者たちは見ている。だが、それこそが無自覚な労働者を「翻身」させる最も有効な手段であることと知り、驚きの声さえ上げている。

中国革命は古い中国の何もかもを、急速な勢いで変えていった。事態の進展は、あまりにも急激であり、丸沢の目にも、異様に映った。新と旧とが激しく入れ替わっていったのだ。日本人科学者たちも、否応なく緊張した社会変革の波に洗われることになる。が、社会のあらゆる分野に作り出される新しい緊張関係と激しい変化のさまを、丸沢は科学者らしい冷静な目で観察している。

中国の革命者たちが何よりも重要だと考えたことは、彼ら自身が大衆との融合を目指す努力だった。彼らは自らを変革することを通じて、革命の対象たる「大衆の意識」を変えようとしていたのだ。要するに、そこで展開されていたのは、寡黙な大衆に口を開かせることであり、そのことによつて、大衆のエネルギーを引き出すという運動を本気になって展開していたのである。

その最も効果的なやり方と信じられていたのが「説得と学習」であり、その努力の連続の一番先頭に立つのが毛沢東が指導する共産党だった。

緊張関係のうちに事態が進展する以上、異質な世界と結び付ける仕事に数々の困難がともなうのは当然である。まさしく事態は革命的に進展をみせていたのだ。その革命による激しい変化のさまを、丸沢常哉たち日本人技術者は、驚きの目で見守っていた。新中国の誕生で大連は、活気に溢れて、人々は何事に対しても積極的だった。生産に貢献した労働者は「労働模範」として賞賛され、革命は新しい英雄を生み出し、その英雄の活躍ぶりは、大きく報道され、新聞紙上を賑わせていた。ともかく、日本人技術者たちが協力した工業博覧会は成功裏に終わった。

明けて昭和二十五（一九五〇）年四月、北京中央政府は、重工業部を中心とする調査団を大連の科学研究所に派遣する。調査団一行には阪大工学部醸造科出身の朱と名乗る一人の青年が参加しており、学生時代に丸沢常哉の講義を聞いたとかで、丸沢は懐かしい日本を思い出したりした。調査団の主要な目的は、大連鉄路局管理時代に萩原定司など文献整備委員会が整理にあたった研究報告書の抄録を全部中国語に翻訳することにあつた。

これらの文献は、旧中央試験所を中国の管理に移管するに際して、例のコザレフ管理官が搬出したもので、しばらくの間大連図書館に死蔵していた貴重な文献である。

丸沢常哉はそれを取り戻すことを思い立ち、科学研究所幹部に進言し、新中国誕生後ソ連側と交渉させて、このときには幸いにも研究所の書庫に戻されていた。

その文献のなかには、丸沢が李亜農の求めに応じて書いた「東北に於ける工業資源とその利用及び科学研究所の任務について」と題する長文の意見書なども含まれていた。調査団の報告書は、一年後に数百頁の単行本として、重工業部から出版されている。

報告書には丸沢の意見書も誤りなく中国語に翻訳され、転載されているのを、丸沢は確認している。

昭和二十五年の秋、それまで大連大学の校長を兼務していた屈伯川所長が兼務を解かれて、専任の科学研究所の所長として董農という人が赴任してくることになった。丸沢と董農とは、旧東洋パルプ工場の復旧問題を通じて、旧知の仲にあった。

丸沢がパルプ製造では権威者であることを知った董農は、同工場に留用中の横川孟よこかわはじめの紹介状を携えて大連にやってきた。そのとき董農とは、数時間にわたってパルプ工場の再建問題を語り合ったものだった。

新しい専任所長が赴任してきたのと併せて科学研究所は、大連大学の付属研究機関から独立して、東北人民政府工業部に移管されることになった。直接的には長春科学研究所の指揮監督を受ける、分所として位置づけられることになる。科学研究所は東北人民政府工業部の所属になってから、豊富な予算が支給されるようになり、これ以降、研究活動は本格的に再開されることになる。

董農の所長就任と前後して、科学研究所には旧満州化学にいた浜井専蔵博士、また、鞍山製鉄所に留用中だった大野二夫が科学研究所に転出してきたこともあり、これによって科学研究所における日本人技術者は総勢十二名ということになった。新所長の董農という人は、相当な人物であったようだ。

「董所長は就任の当初、自分は研究所の業務には全然未経験であるから、万事宜しく指導をお願いすると、極めて謙虚な態度で接したが、やがて筋金入りの党員の本領を発揮した。彼の施策は緻密でかつ積極的で間もなく所内には質実剛健な新風を巻き起こした」

と丸沢常哉は新所長董農の印象を書いている。董農は新中国における典型的な政治家であり、確かにやり手だった。科学研究所の歩むべき方向を、東北における化学工業の再建に協力することだと定め、科学研究所の職制と機構を改革し、職制と労働条件を明確に規定した。それまでの科学研究所といえば明文化された

規程はなかった。

要するに、問題が起こるたびに、幹部が協議の上で、慣例で問題を処理するという方法を取ってきたのである。董所長によって初めて諸般の規程が明文化されることになったわけだ。

董晨は精力的な男だった。研究所の機構改革を終えると、今度は研究人員の拡充に取り組んだ。まず、旧中央試験所時代から働いていた労働者の大半を他の職場に転出させ、教育を受けた新しい時代の職員をどんどん採用していった。研究員八百名体制を作ることが董晨の目標であり、このなかで大学を卒業した若い研究者を大量に採用している。

彼が掲げた研究の目標は「工業部の方針に即応して、東北地区の化学工業の生産力を速やかに回復させる」ことにおかれた。そのころから科学研究所は、東北各地の工場と頻繁に連絡を取り、研究課題は工場では解決困難な問題が取り上げられるようになる。

何しろ東北は国共内戦で、工場設備は破壊され、その上に同盟国ソ連が重要生産設備を本国に持ち帰ったものだから、生産力は目を覆うばかりに低下していた。だから科学研究所の仕事は生産復興に全力が投球され、現場の工場からは、山ほど問題が持ち込まれていた。ただ、彼らの仕事のやり方はユニークであった。いずれの場合も、集団討論で問題解決に当たろうとしていたのだ。丸沢常哉によれば、例えば、研究テーマを決める手順は次のようであった。

「問題ごとに研究責任者を任命して、研究の目標、研究実施の方法、順序、完成の期日、必要な人員、器具、機械、設備、薬品などの名称と数量を明記した計画書を提出させ、問題ごとに若干名からなる研究小組を作り、集団の力で解決に当たることにした。研究責任者は小組の指導者であるが、民主的に研究を実施するため、独断の命令を避け、毎日実験開始前に小組の全員を集めて、前日の実験成績を検討して、その日の実験のやり方を決めることにしていた。」

このやり口は指導者個人の個人英雄主義に反対して、研究従事者全員の意見を尊重する主旨であって、全員が研究の目標を明確に確認するとともに、地位は低くても知恵を絞って独創力を発揮する途を開いた」

丸沢は、董晨所長の指導のもとで実施された、新しい研究のやり方を絶賛している。要するに、中国共産党の大衆工作の伝統である「説得と学習」に加えて董

農所長は「討論」という新しい「伝統」を科学研究所に持ち込んだということである。

時間と手間のかかるこのやり方は、研究責任者となった洋行帰りの高級研究員たちの間では不評であった。だが、高級研究員たちは所内で暫時展開された各種の政治活動、とくに思想改造運動の際に、激しく批判され、それがまた、青年研究者たちの研究に対する意欲を高めたとも、丸沢は書いている。

ともかく、終戦以来四年あまりにわたって中断していた研究業務は、新中国が誕生したのにもなつて、こうしてようやく再開されることになった。科学研究所に要請される任務は、しかし、まだ、各工場の要請に基づく復興計画の立案や分析試験などが中心ではあったが、日本人の研究者にすれば、これでようやく本来の仕事に戻ったことを意味するわけであり、中央試験所は本来、基礎研究から工業化にいたる全般の研究をしていた研究機関であったから、その意味でも本来の研究業務を再開したということとなる。

丸沢常哉はこの時期、終戦以来、初めて東北奥地への旅をしている。昭和二十六年春のことであった。大陸の春は美しい。乾いた大地に薄い緑が一面に広がり、それが瞬く間に大地を覆い、後を追うようにして、いっせいに花が咲き乱れる。だが、丸沢はこの旅では寝台車で死んだように眠り、大陸の風景に見とれるゆとりはなかった。

早朝に列車は長春駅に着いた。丸沢には特別な思い出のある街である。思い起こしてみれば、化学工業委員長として、関東軍の将校連中と激しく渡り合ったのもこの長春でのことであった。また、丸沢自身もその創設に深く関与した大陸科学院が、長春科学研究所として引き継がれているのを見て、初代院長を務めた鈴木梅太郎博士のことなども懐かしく思い出されたのであった。

長春には二十余名の日本人技術者が留用されていた。志方益三博士の元気な姿もあるではないか。内戦のさなかにあつて、志方益三博士が長春に留まって、大陸科学院の研究施設を守り、その再建のために献身的に努力された功績はまことに偉大であると、丸沢は旧友との再会に喜びを隠していない。

また、元鞍山製鉄所で常務を務めた梅根常三郎博士の元気な姿もあった。貧鉱石処理法の発明で科学者としての名声を掴んだ梅根常三郎博士はそのとき、長春科学研究所の顧問として、冶金部門の研究を指導していた。織田三郎も丸沢には

懐かしい顔だった。それだけでなく、いつときは、死亡説が流れていた埴谷正雄はにやまさおの元気な姿を見て、丸沢は我が目を疑ったものだった。

丸沢の訪長を記念して、このとき長春の科学研究所との間で合同会議がもたれ、大連と長春で研究テーマがダブらぬように調整なども行われた。やはり、丸沢は科学者である。丸沢を囲んで催されたパルプに関する座談会で、熱心な中国人の質問責めにあつて、丸沢は嬉しい悲鳴を上げている。

終戦間際に中央試験所から化学工業委員会の幹事に転出し、終戦を長春で迎えた森川清博士は、やはり、東北人民政府の要請で留用に同意し、長春大学工学院の教授を務めたあと、丸沢常哉が長春を訪ねたときには、撫順炭礦に転勤となっていた。森川博士も元気であるらしい。

終戦直後、奥地に散り、消息の途絶えていた研究所の同僚やかつての部下たちが元気で働いているとの消息を聞き、丸沢常哉は安堵の溜息を漏らしたものだ。帰路は瀋陽で夜が明け、大連までは昼の旅となったが、窓から眺める南満の風景は、戦前と少しも変わりなく、何の感慨も得られなかった、と丸沢常哉は書いている。

帰還技術者の就職斡旋に奔走

佐藤正典が乗船した帰還船「大海丸」が九州・佐世保に入港するのは、昭和二十二年四月一日のことであった。天井から吊された裸電球が一つ、船底での船旅は、佻しいものだった。満鉄中央試験所の元所長・理事とはいっても、そんな肩書など終戦後の祖国日本では、何の役にも立たない。佐藤は、敗戦の悲惨さを実感させられるのであった。

佐藤は病身の妻を労りながら、健康診断など所定の手続きをして、大陸からの引揚げ者の誰もそうであったように、収容所に入る。収容所生活を終えると佐藤夫妻はとりあえず義兄が住んでいる芦屋に向かうことになった。佐世保から引揚げ列車に乗って、三宮駅に着いたのは、四月初旬のことであったという。

佐藤が内地に引き揚げたその年、祖国日本は終戦の混乱のなかで騒然とした状況にあった。

前年（昭和二十一年）の食糧メーデーに続いて、官公労の労働組合を中心に、労働攻勢は日増しに勢いをまし、大規模なストライキやゼネストが計画され、革

命前夜であるかに錯覚させられた。

のちに二・一ストと呼ばれるようになるゼネストは、占領軍当局の禁止命令で不発に終わったけれど、四月に行われた総選挙では、社会党が第一党に躍り出て、一部保守政党と連合して、日本国憲法発布後、最初の内閣が誕生したのは六月のことであった。

だが、一方では米ソの対立が顕在化して「冷たい戦争」のもとで、米国占領当局は、次第に極東戦略を転換しつつあった時期でもある。

ともかく、庶民が求めているのは、食料であり、そして、戦火で焼け出された人々や引き揚げ者にとっては、住む場所を確保することだった。誰もが飢えを凌ぐのに懸命で、食料と職を求め、街の中をあてもなくさまよっていた。飢餓とインフレに対する戦いを勝ち抜くこと、それが庶民たちにとっては、最大の課題であったのだ。誰もが他人をかえりみるゆとりはなかった。荒廃した祖国日本は人心とも荒廃し、佐藤には想像を遥かに超える酷い事態だった。

だが、佐藤は無事大陸から引き揚げてこられただけでも、幸運といわなければならぬだろう。大陸に残った同僚たちは、それこそ内地とは比べものにならない、つらい地獄の日々を送っていたのである。

三宮駅前には、先に帰国していた長男洋一、柳原家に嫁いでいた長女昭子の姿があった。洋一は旅順高等学校を退学して三高を受験した。三本の白線の入った制帽をかぶっているところを見ると、どうにか入学を許されたらしい。ともかく、義兄の家に入ったんは落ち着こうとしたのだが、義兄一家も米占領軍によって、芦屋の家屋敷は接収され、これまた、親戚の家に一家して居候の身ということだ。そう長居もできない。

が、このとき懐かしい顔が、佐藤正典のもとを訪ねてくる。鉛市太郎博士だった。鉛博士は満鉄を退社したあと、大阪帝大に奉職して、終戦のときは阪大産業研究所に身をよせていた。豪快な酒の呑み方は、相変わらずだった。何力年ぶりかで、鉛先生にお目にかかり、ともすれば沈黙する気持に、鋭気を呼び戻すことができた。鉛博士の来訪をこのとき佐藤正典は素直に喜んでいる。

帰国後、佐藤は、満鉄時代に石炭液化問題で知遇を得た京大の喜多源逸博士、また、阪大の上野誠一博士うえのせいいち、さらに富久力松東洋ゴム社長を訪ねるなどして、学界の近況や産業界の動向などを調べたり、関西の各方面を精力的に回っている。

いずれも、帰還技術者たちの処遇を考える上では、知っておかなければならないことだったが、終戦から二年を経過したというのに、まだ、厳しい状況にあることを知らされる。鉛博士も満鉄帰還技術者のことが心配であったらしい。そのとき鉛博士は、日本触媒化学工業の八谷泰造社長を紹介している。

のちに日本触媒化学工業には、石川三郎、佐久間滋、中島爾、小田憲三などといった人々が入社することになるのだが、佐藤がこのとき鉛博士の紹介で八谷泰造社長と知遇を得たことが縁となっている。

また、八谷社長は丸沢常哉が阪大教授の職にあったときの教え子でもあった。人間の縁というのは奇妙なものだ。丸沢と鉛市太郎とは、東大での親友であったし、その丸沢と佐藤は親密な師弟の関係にある。さらに佐藤と鉛市太郎は中央試験所で一緒に仕事をするなかで緊密な人間関係を作っていた。その人間関係が戦後、再び大阪の地で固く結びつくのだ。

芦屋にじいっとしていても、事態は動きそうにもなかった。それに東京の様子も知りたいと思った。そこで、さしあたり東京大岡山の実弟の家に厄介になることにした。上京したのは、新緑がいつせいに芽を吹き出す五月初旬のことであった。

やはり、東京も一面が焼け野原。首都東京は無惨にも破壊されていた。東海道の車窓から見た京浜工業地帯も、戦火で酷い状態にあった。生産設備のほとんどは、灰塵と帰っていたのである。祖国日本の復興は容易なことではなさそうだと、佐藤はここでも敗戦日本の悲惨な状況を目にして、暗澹あんたんたる思いにかられた。佐藤は実弟の家で、ただ呆然として、二ヶ月ほど終戦引き揚げによる疲れを癒している。

そんな佐藤を訪ねたのが、白石しらいし竹市たけいちであった。白石は満鉄撫順炭礦の次長を務めた男であり、佐藤とは中津中学の同窓でもある。訪ねたのは、帰還早々の佐藤正典の身を案じてのことであり、それに未帰還満鉄関係者の消息も、白石には知りたいところだった。

「佐藤さん、困ってはいませんか」

白石は挨拶もそこそこに、いきなりこう切り出した。困っているどころの騒ぎではないのだ。仕事もなければ、金もない。そのうえに病妻を抱えての生活である。長男の学費すら思うに任せない状態なのだ。いや、佐藤には丸沢常哉との堅

い約束もあり、落ち着きしだい帰還技術者の鼓職の面倒もみねば、と考えていたところだった。渡りに船とは、このことである。

「君に紹介したい人物がいる」

白石はそういうと、即座に立ち上がった。連れていかれたところは、武蔵野市吉祥寺の御殿山だった。表札をみると「斎藤茂一郎」とある。

斎藤茂一郎は戦前から戦中にかけて、満州で事業経営を行った人で、満鉄関係の仕事をするなど、満州ではちょっとは、名の知れた経済人であった。斎藤は国士こくし的な人物であったようで、当時は公職追放で浪々中の身の上だった緒方竹虎おがたけとらなどの面倒をよくみていたようである。御殿山に堂々たる邸宅を構えていた。

その斎藤茂一郎は、佐藤に向かってこういったものである。

「思わぬ敗戦によって、憂目をみるにいたったが、長い間満鉄に尽くされた功勞者に対して報いるためには、せめて古参の先輩たちが十分の英気を養うに足りる生活費ぐらいは、無条件で提供したい」

佐藤はこの人との出会いを「地獄に仏」と喜んでいる。それにしても、佐藤正典という人は、幸運な星のもとに生まれた人のようである。大学の卒業間際に姉の嫁ぎ先から学費の援助が途絶えたときには、大連の佐志雅雄という素封家が佐藤を助けたし、満鉄に入ってから、金遣いの荒い佐藤を心配して、恩師丸沢常哉が三千円もの預金通帳を、佐藤のために残している。この佐藤という人の面白ところは、そうした周囲の援助を躊躇なく受け入れるところである。今度の斎藤茂一郎の援助もそうであった。

佐藤正典の自伝によれば、

「ふつてわいたこの幸運に感謝し、斎藤さんから家族の体力を回復するようにと加えて北海道行きの旅費までも都合して貰った。激動する経済危機のなかであつて、約一年に渡り、暖かい庇護のもとに過ごすことができたのはこのうえもない幸せであつた」

と斎藤の援助の申し出を照れることもなく素直に喜んでいる。佐藤という人は、つくづく得な性格だと思う。

斎藤茂一郎との出会いからしばらくして、佐藤正典は大岡山の実弟の家を出て、新たに高輪南町に住居を定め、北海道の実家に帰っていた妻を呼び戻し、大連から帰還して初めて落ち着く住処をつくる。

明けて昭和二十三年。このころになると、満州大陸や朝鮮、台湾などからどんな引き揚げ者が内地に帰ってきていた。もちろん、満鉄中央試験所の同僚の多くも、この時期に内地に帰還してきている。

佐藤は丸沢常哉との約束を果たさねば、と考えていた。佐藤が満鉄中央試験所の帰還技術者の就職の斡旋に本格的に動き出すのは、このころからである。そこで、外地から帰還する技術者のために、新しい研究所を作る構想を思いつたりもした。

佐藤はこの構想を斎藤に話した。斎藤も賛成してくれた。一元満鉄副總裁の佐藤応次郎さとうおうじろうも後援を約束してくれた。満鉄や満州国など満州関係の先輩たちの間も歩いてみたが、彼らも概ね賛成だという。

気をよくした佐藤は、東大教授の亀山直人かめやまなおとや三菱財閥の中原省三なかはらしやうぞうなどを巻き込み、関係者の間を応援を求め精力的に歩き回った。いよいよ資金計画に取り掛かったのだが、そこで佐藤の立てた「国策科学研究所構想」は資金集めが思うようにいかず、いかにも甘い計画であることを思い知らされるのである。混乱した戦後の世情は、そんな夢物語のような「国策科学研究所構想」に資金を提供できるほどゆとりはなかったのである。

結局、「国策科学研究所構想」なるものは挫折するのだが、夢が破れたからといって、旧満鉄中央試験所の帰還技術者を放置しておくわけにはいかないのだ。後から後から引き揚げてくる同僚たちの身の上気がかりである。

席が温まる暇もなく、佐藤は各方面を忙しく駆け回る日々を送っていた。そのころから佐藤は高輪南町の自宅に満鉄中央試験所の関係者を集めて、今後の生活問題をいかに打開するかを協議したり、また、身の振り方について相談に乗ったりしている。高輪南町の佐藤宅は、いつときいわば、旧満鉄中央試験所の就職斡旋所のごとくの態をなしていた。

そんな状態は関係者の引き揚げが一段落する昭和二十四年ごろまで続いていた。

この時期、佐藤正典の世話で、第二の人生を歩むことになった満鉄技術者は、それこそ数知れない。最後の帰還者となった萩原定司はこんな証言をしている。

「何らかの形で、佐藤さんの世話になった中央試験所の関係者は、恐らく全体の八割近くになるのではないでしょうか。佐藤先生は実に面倒見のよい方でした

ね」

ついでにいつておけば、萩原定司は考えるところがあつて、帰国後は研究生生活には戻らずできたばかりの国際貿易促進協会という民間団体に籍をおき、日中経済関係の促進を生涯の仕事とすることになる。

帰国したあるものは大学の教壇に立ち、あるものは産業界に入るなど、帰還技術者が各々職を得て、身を落ち着かせるのは、昭和二十五年ころのことであつたという。

なかには戦後の苦境に処し、自ら企業家の道を開き、経営にあたるものもあつた。理学、工学、農産、薬学など専門分野では、学界や化学工業界のなかにあつて、戦後、指導的な役割を果たした人は少なくない。長年の大陸での生活や新中國での知故と人脈を生かして日中経済交流の促進に自ら先頭に立つた萩原定司は、なかでも異色である。

学界に入った主だった人々をみると、伊藤四郎、森川清は東京工業大学、猪口全太郎ぜんたろうと千葉喜美、深町富蔵は千葉工業大学、遠藤外雄えんどうそとあと金子好博かねこよしひろは立命館大学、奥野源次郎は近畿大学、最後の留用者となつた小田憲三は日本触媒化学から後に高知大学に入った。

緑川林造は北海道大学、同じく最後の留用者関皓之は愛媛工業大学、また、高嶋四郎も愛媛大学の教壇に立ち、田中泰夫は富士製鉄を経て芝浦工業大学、重水の研究でソ連当局から原爆開発の嫌疑をかけられた廣田鋼蔵は大阪大学の教壇に立つた。

上池修かみいけあさむ、米田経宇よねだけいう、梅田耕造は大阪府立大学、有森毅ありもりたけしは京都繊維工芸大学、齋藤樞夫は福井大学、篠崎有一は岡山大学、六所文三は明治大学、井爪清一は天理大学。

一方、産業界では五十嵐正次は恩師の薦めで日清製油、石川三郎、佐久間滋、中島爾などは日本触媒化学、高木智雄、石黒正、橋本国重はしもくにしげなどは日本揮発油、D Tの根岸良二は日本石油や古河化学で役員を務めたし、浜井専蔵と西田房雄、仁林万木雄は戦後発足した、三菱系のエンジニアリング会社である千代田加工建設に入った。

吉村倫之助は旭硝子の顧問、日下和治は新日鉄の技術顧問、瀬戸巖せといわおは鐘淵化学に入つて活躍している。なお、終戦時、中央試験所の総務課長を務めた大形孝

平は目印経済協力調査会の事務局長を務めた。

例の阿部良之助博士は帰国後、中共の内幕を暴露するような文章を書き、いつときは論壇で華華しく活躍したようであるが、最後は日本揮発油の川崎工場の顧問などを務めた程度で、科学者として活躍する機会は少なかったようである。関係者によれば、戦後の阿部良之助博士には往年の満鉄時代のあの自信に満ちた姿は認められなかったという。

彼らの学問的な業績や中央試験所で蓄えた経験からして、それが満足できる働き場所であったかどうかは別にしても、ともかく、最後の満鉄中央試験所の所長を務めた丸沢常哉が心配していた、帰還技術者たちの再就職問題は一応解決をみて、彼らは各地に散り、その活躍する舞台は多彩であった。

さて、佐藤正典のことだが、東京在住の間にさらに交友関係を広め、幾つか就職の誘いを断わり、最終的には真島利行ましまたしゆきの薦めで、大阪府立工業奨励館の館長として、大阪に赴任することになる。鉛市太郎博士も館長就任を熱心に勧めてくれたらしい。それは昭和二十三年六月のことであった。

佐藤はときに五十八歳であった。以後、大阪府立工業奨励館の館長として八年間務めたのち、東京に戻り、昭和三十一年に創設後間もない科学研究所の社長に就任、さらに千葉工業大学の学長を経て、人事院の人事官に就任するなど、華々しい活躍をしている。

科学者というのは、だいたいが地味な存在である。帰国後の佐藤の場合は、学界や産業界、官界、果ては政界まで、その人脈の広さは驚嘆すべきものがあつた。中央試験所関係者のなかでは異色な存在ではあつた。

政治闘争の嵐に直面

再び大連に残された旧満鉄中央試験所の科学者たちのことである。敗戦の祖国に引き揚げた科学者たちも、厳しい現実に直面するのだが、それにもまして、残留科学者たちの運命は厳しいものがあつた。

丸沢常哉という人物は、世間に名を残すことなど、毛ほども気にとめるような人ではなかった。新中国が誕生してからも、日本人留用者の最高責任者として、黙々と自己の任務に忠実に精勤していた。

だが、順調にスタートを切ったかにみえた研究所の活動も、新中国誕生後巻き

起こった政治の嵐に揺れをみせて、日本人科学者たちも激しく翻弄されることになる。

だからといって、丸沢常哉は絶望することもなかったし、迎合的な行動を取るような軽率なこともしなかったし、あくまで冷静に事態を観察する科学者の立場を崩すようなことはなかった。

昭和二十五年六月朝鮮戦争が勃発した。丸沢常哉たちがいた遼東半島は、朝鮮半島に近い。市内には「抗美援朝」のスローガンが張り出され、空襲の危機にさらされながら、避難訓練を繰り返したりもした。米国の朝鮮侵略に抗議し、朝鮮を援助しようという運動が巻き起こっていたのだ。この間、研究業務はいつさい停止した。

新中国は政治的にも緊張した状態におかれるようになる。朝鮮戦争の勃発を契機に繰り広げられた「愛国衛生・反革命鎮圧」運動はのちに「三反五反」運動に継承され、残留日本人たちは、運動の盛り上がり、異質なものを感じながらも、次第に巻き込まれていくことになるのだ。

中国は、彭徳懐ほうとくぐわい將軍を総司令とする「人民義勇軍」を朝鮮半島に派遣して、米軍と激しい攻防戦を演じ、その結果、おびただしい血が流された。しかし、中国が朝鮮戦争に参加していったことは、同時に台湾に追い込んだ蒋介石の国民党に反撃のチャンスを与えることになり、さらにいえば、米国による「中国封じ込め」政策が、中国の国際的立場を困難なものにさせていた。

他方では、建国後まもない中国の経済は疲弊しており、加えて朝鮮戦争では多大な戦費を消費し、その負担は中国の上に重くのしかかっていたのだ。

中国の指導部は反革命内乱の危機を本気で考えていたし、いや、国内では旧地主や国民党の残党が米国の援助を得て、大陸に進入してくることを本気で恐れていた。おそらく、当時の中国の情勢を考えるならば、もう一度米国がやってくるかもしれない、という予感を決して非現実的な考えではなかった。

実際の話、マッカーサー元帥は、大陸に原爆を投下することを真剣に検討していたのである。丸沢常哉が目撃した「三反五反」運動は、ちょうどこの時期と重なっている。

中国革命後、知識人にとっては受難の時代が続くのだが、フランス留学帰りの

ある科学者が、運動の厳しさに耐えかねて自殺する事件なども、日本人科学者たちは目撃することになる。この運動の模様を、丸沢常哉は次のように書いている。これは科学研究所の経理科に勤務していたある青年にまつわる事件である。

窃盗容疑を受けた青年は、激しい批判の矢面に立たされた。けれども、あくまで事実無根を半張して譲らなかったので、最後に職場連合の批判大会で自白を迫られた。それでも彼は頑強に犯行を否認した。そこで会場に待機していた公安隊員に引き渡された。公布された法律では、公の財産を一億元以上窃盗したものは、死刑と定められてあった。青年の罪は、それに該当した。公安の手によって犯罪の有無が徹底的に調べられた。その結果、彼はシロだと判断された。

「度重なる批判会でも、同僚から激しい非難を浴び、危うく死刑に処せられる危機に立たされながら、その青年は断固として、無実を主張して、あくまで屈しなかった彼の態度は私どもに深い感銘を与えた」

と丸沢常哉は筋を曲げずに無罪を主張して頑張った青年に感動を覚えながらも、無実が立証され、釈放されたことにホッと胸を撫で下ろしている。

この運動では廖華に関する汚職の嫌疑も問題にされ、丸沢も関連した質問を受け、その疑いは極めて濃厚であることを、調査の過程で丸沢たちは知った。運動の過程で次から次へと新しい事実が暴露されていくのだ。だが、廖華は優秀な党员であり、その彼が汚職に関与していたとは考えてもみなかったことで、さすがの丸沢も大きな衝撃を受けたようであった。丸沢も自身の問題に関して、所長の董晨から批判を受ける。

「あなたは、日本人をかばいすぎる」

というのが批判の中味であり、それが民族主義的であるというのだ。丸沢の性格を考えれば、あり得る話だとは思いつ、なんだかこじつけの批判のようにも聞こえるのだけれど、問題が起こるたびに日本人のために弁明に努めたことは事実である、と董晨の批判を素直に受け入れている。

けれども、丸沢常哉が政治的に孤立し、絶体絶命の淵に追い込まれるのは、このときではない。のちに詳しく触れるが、丸沢常哉たち日本人技術者の本当の苦難は、この後に始まるのである。「反右派闘争」の過程で、「丸沢を殺せ」などというスローガンまで飛び出す。ここで丸沢常哉は猛烈な反撃に出る。

この時期、大陸中国では、土地革命が順調に進み、さらに合作社の組織化など、

着実に農村での革命は進展をみせていた。要するに農民の集団化が進められていたのである。中国は昭和二十八（一九五三）年から第一次五カ年計画がスタートを切り、朝鮮戦争が終息したあとの経済建設は順調な進展をみせていた。この時期は政治的にも比較的安定した時期であった。

昭和二十八年三月、スターリンの死亡が伝えられる。毛沢東は複雑な思いで、スターリン死亡のニュースに接したに違いない。というのは、スターリンの死後、ソ連共産党の中央を制覇したフルシチョフは、米国との平和共存路線を打ち出す一方で、大胆にもスターリン批判を行ったからだ。それが一九六〇年代に入って、フルシチョフ秘密演説の当否を巡って両党間に激しいイデオロギー議論が巻き起こり、中ソに深刻な亀裂を生じさせることになる。

昭和三十一年（一九五六）年の五月、毛沢東は最高国務会議で演説し「学術研究における百家争鳴」を提唱している。この方針を受けて、翌年四月には共産党自身の整風運動が始まり、やがて運動は党外にも広がりを見せて、知識人や民主党派に属する人々から、共産党に対する批判が続出し、運動は全国的規模でいつきに燃え上がっていった。

また、急速な集団化政策には保守的な農民層は強く抵抗し、農村でも共産党との間に軋怖が生じていた。それが「百家争鳴」と共鳴しあいながら、共産党の一方支配の根幹を揺るがしかねないほど、運動は盛り上がっていく。それは、おそらく毛沢東自身も、予期しなかった事態に相違ない。

そして共産党は反撃に転じる。いわゆるそれが「反右派闘争」運動に発展することになるのだが、運動の波動は逆転を始め、知識人には暗く切ない時代となった。

再び丸沢の自伝からの引用だが、その運動の模様を丸沢は次のように書いている。

「運動が展開されるようになったとき、全国の大学や研究機関に在職中のインテリ層には一大ショックを巻き起こした。彼らの大多数はブルジョア出身で、毛沢東のいう自由主義者であり、アメリカ力崇拜者であった。彼らの思想に対する批判は極めて深刻かつ嚴重であった。有名な学者は続々と自己批判書を発表して自己の誤りを認めた。これと同時に『ソ連に学べ』という運動が開始され、これと関連してロシア語の学習熱が高まった」

新中国での研究業績

丸沢がいうように、この時代は「ソ連一辺倒」の時代でもあった。科学研究所でもさつそくロシア語速成班が組織され（昭和二十七年末）、丸沢常哉も素直にロシア語学習運動に参加している。当時、東北（長春）大学自然科学院で工学系主任教授として教壇に立ち、同大学教授を兼務する形で撫順炭礦で石炭液化工場の改修復興にあたっていた森川清は、驚くべき丸沢の語学の才能をこんなふうに話している。

「私もロシア語を習ったのですが、てんでモノにならなかった。先生は六十代でロシア語の学習を始められて、日本人の研究員のなかでは一番上達されたということです」

また、萩原定司もこんな疎言をしている。

「英語やドイツ語を縦横に駆使され、ソ連の学者と折衝されるかたわら、ロシア語を熱心に勉強されていました。二キロほどもある通勤の途中先生は、ロシア語のカードをめくりつつ歩き、マスターされたのです。ソ連との交渉のときなども、ロシア語で原稿を作り、交渉に臨むわけです。まったく頭が下がる思いでしたね」
萩原はそうした交渉の席に幾度も同席しているのだが、森川清は丸沢のロシア語に関して、もう一つエピソードを話している。

昭和二十七年のはじめ頃、撫順から大連に出張したときのことであった。そのとき、丸沢は森川に一冊のノートを手渡している。それはソ連で発行された『人造液体燃料』という新刊書のロシア語からの英訳であり、撫順で石炭液化の復旧事業に従事していた森川には、またとない有難い文献であった。

丸沢も森川がどんな仕事をしているかを知っていたのだ。参考になればと、英語に完訳して、それを森川に手渡したのであった。この新刊書には、最新のデータが満載されている。例えば、ソ連石油の高圧気相水添加分解の速度式が出ていた。

「これによってオイルシール水添加反応の物理像を描くことができた。これが留用解除後、日本への最大のお土産になった」

森川は手放して喜び、かつ丸沢の配慮に感謝の言葉を述べている。ロシア語の学習のこともさることながら、新中国にあっても丸沢の学問に対する意欲は、少しも衰えてはいなかったようである。

ところで、日本人科学者たちが新中国に残した研究業績のことに關してだが、丸沢の自伝によれば、十六項目にわたる研究テーマを取り上げ、大きな成果を上げている。例えば、関皓之は珪素煉瓦や標準ゼーゲル錐の研究で成果を上げたし、浜井専蔵はフィシャー法触媒の研究にあたり、また、小田憲三は森川清たちと協力して、オイルシエールの水添加によるガソリンの研究にあたり、久我敏郎は写真用のゼラチンの研究、井爪清一は農薬や乾燥野菜などの研究を進めた。

また、萩原定司は研究業務の基礎となる文献の整理や収集にあたり、科学研究所が研究機関として再出発する上での基礎を築いた。

満鉄の技術者には、撫順の頁岩油（オイルシエール）開発はことに思い出の深いものがある。

油母頁岩の精製工場は、幸いにソ連軍による撤去を免れ、おりから中国では石油不足もあって、同工場の復旧は解放後の最優先課題とされた。そのために解放後東北（長春）大学自然科学院に勤めていた森川清博士、また、瀋陽にあって潤滑油工場に留用されていた高木智雄が招聘され、この復旧事業に参加することになった。

この二人の科学者は、科学研究所のパイロットプラントを利用することが得策であると、当局に進言して、中国側の協力も得て、長年放置されてあった、パイロットプラントを整備改修して、どうにか工業化に目処をつける。満鉄時代に小田憲三が中央試験所の燃料部で働いたという実績を買われ、途中から撫順の改修計画に参加することになる。

小田は科学研究所と撫順炭礦との連絡調整にあたる。ロシア語で書かれた『人造液体燃料』という新刊書の英訳を、丸沢常哉が森川清に手渡すのも、ちょうど撫順の頁岩油水添加ガソリン製造が完成の時期に入ろうとしている時期だった。ただ、科学研究所が取り上げた研究テーマがすべて工場生産に移されたかという点、そうではない。確かに実験室では、いずれも大きな成果を上げた。けれど、例えば、農産化学などの研究は科学研究所から分離され、それにもなつて、井爪清一や久我敏郎などが長春科学研究所に転出したために、途中で研究が中断された。

おおまかにいえば、科学研究所で働いた研究者たちが、旧満鉄時代の研究を継続させて、さらに新中国の化学工業の基礎を築く上で大きな貢献をしたことは、

正しく評価されなければならないと思う。

丸沢常哉の記録によれば、董農所長は昭和二十七年（一九五二）年秋、瀋陽に冶金研究所が新設されたのにもなつて、副所長として転出する。代わつて所長に就任するのは、副所長の張大煌であった。

このころになると、東北地区の復旧計画はほぼ完成をみて、翌五三年から第一次五カ年計画がスタートする。日本人技術者が留用されたのは、復興計画に協力することが目的であったから、復興計画が一段落したということであれば、もはや留用の必要はなくなる。実際、中国側もそのように判断していたようであり、鞍山製鉄所のような多数の日本人を留用していた工場では、漸次、他の工場に転出させていた。同工場から大野二夫が科学研究所に転出してきたのもこのころであった。

一方、第一次五カ年計画が始まると、ソ連から多数の技術者が工場建設に派遣されるようになり、ソ連技術者との関係で日本人技術者の扱いは微妙となつていった。このとき丸沢常哉は、人民日報に載つた日中双方の赤十字社との話し合いで、中国に残留する日本人をすべて帰国させることを決定した、とのニュースを目にする。丸沢は科学研究所における日本人技術者の最高責任者として、張所長に面談し、このとき帰国の希望を伝えている。

予想したとおりだった。昭和二十八年正月早々、科学研究所人事科長は、帰国の内示を伝えてきた。市政府の外僑科（外事科）に出頭して帰国手続きを取るように、というのが人事科長の指示だったのだ。

組合問題の再燃で帰国中止命令

残留技術者たちは歓喜して外僑科に出向き、帰国の手続きをすませた。市政府の外僑科は日僑勤労者組合と協議して、大連在住約一千名の日本人を二組に分けるなど、帰国の手順も決まった。まず第一組を寺児溝の招待所に集め、三月になると日本人残留者を中山公園に新築した人民公会堂に招待して、市政府主催の盛大な送別会を催したりした。終戦から苦節八年、ようやくこれで祖国日本に帰れる、誰もがそう思った。

旧中央試験所に残留したもののうち、第一組に編入されたのは、内藤、小田、片岡、大竹などで、第二組には関、浜井、大野、萩原、丸沢が入っていた。井爪、

久我、高村なども同様に各地に配属が決まった。先発する第一組が引湯船が待つ秦皇島しんのうじまに向かって出発しようとしていたやさき、突如として帰国延期の通知が届くのである。

「そんな馬鹿な……！」

「いや、短期間の延期だろう」

誰もが楽観的だった。というのは満州奥地で働いていた留用技術者たちが相次いで帰国を開始していたからである。だから延びたとしてもせいぜいが、二、三カ月程度ということだろう。要するに、楽観論が大勢を占めていたということである。

ところがそうではなかったのである。三カ月が過ぎた。いつこうに帰国命令は出そうになかった。十月に入って、大連の科学者たちの間に「引揚げ中止になったらしい……」という情報が伝わってくる。

追い打ちをかけるように、大連在住の残留者に対して、各職場の人事科長から正式に帰還中止の命令が伝達されたのである。丸沢常哉たちには、寝耳に水だった。中国当局に理由を訊ねると、中国側は、

「日本政府が帰還者を政治的に迫害する恐れがあるので、一定期間中国政府が保護する必要が生じたため」

という公式説明を繰り返すだけだった。それはどうやら本当の理由ではなかった。実をいうと、帰国直前になって日僑勤労者組合問題が再燃したのである。

つまり、組合の執行部から「反動」扱いされた一部の人々が帰国を前に「名誉回復」を求め、市政府当局に直訴したことから、組合は執行部と反執行部とに分かれ、果てしない論争を行っていたのだ。組合問題の遺恨から帰還船のなかでリオンチ事件などが起こったりしたことを、中国側も知っていた。

「このままでは、帰せない」

と中国側は判断したのかもしれない。ともかく、組合問題が再燃したために、大連在住の留用者の帰国は中止されることになったのである。中国建設学会の呼掛けに応じて、満州の奥地で経済復興事業に参加し、最後の帰還船に乗るべく大連で待機していた福田熊次郎は、極左旋風が吹き荒れた当時の状況を次のように話している。

帰国後、ヤマト染料という会社を経営した福田は、丸沢らとともに帰国直前に

四川省の奥地の工場で働いた一人である。

「あのときはひどいことになっていまして、丸沢を殺せなどというようなスロークンガが方々でいわれ、またマンガに書かれたりして、しかもそれが小学校、中学校にまで波及するありさまでした。『丸沢は人民の敵だ』というようなことになっていまして……あのときの状況は現地におられた方でないと想像がつかないことですが、奥地ならば確実に殺されていますね」

丸沢常哉を「殺せ」とまで、叫んだ組合問題とは、何であったのか。丸沢常哉は日僑勤労者組合の功罪について、冷静な筆致で次のように書いている。

「組合創立後石堂委員長退任ごろまでは、中国人も日本人も共に最も苦勞した時代であり、この間に処して奥地から流れ込んだ多数の難民を救済し、二十数万人の日本人移送という大事業を短期間で完遂させたのである。若干の行き過ぎや欠点があったとしても、その功績は高く評価すべきである。」

次に英哲夫委員長時代にはプラスとマイナスの両面があり、功罪相半ばしている。最後の関勉（仮名）委員長はマイナスの連続であった。被留用者はすでに全部中国総工会に加入し、中国人と全く同一の扱いを受けた。また学習のごときも所属の職場で十分の機会をあたえられていた。日僑組合は、すでに存続の意義を失っていたのである。にもかかわらず組合員の闘争にあけくれ、両派とも多大のエネルギーを消耗し、かつ家族ともども極めて不愉快な日を送らねばならなかった」

組合が極左的傾向を強めていったのは、昭和二十四年ごろからであった、と当時の関係者は証言している。いたるところで異様な光景が見られ、中国の運動をまねて、日本人社会のなかでも「批判会」が流行し、子供たちの遊びにも「批判ごっこ」が行われたほどだった。そんななかで、執行部内部の主導権争いに端を発し、当時の委員長だった英委員長に対する批判の声があがり、執行部に対する批判大会が開かれることになった。

その背後では、組合の主導権を握ろう、と関勉方記長が暗躍していたのだ。そんなことを知る由もない丸沢は、批判大会に傍聴人として出席して、発言している。

「非難は英委員長に集中しているが、責任は執行部にもあるはずだ。処分を決議するのであれば、代議員を選出し、臨時組合大会を開き、そこで決めるべきであ

る」

英委員長を追い落とすことで、組合の主導権を握ろうと画策していた関勉には、裏があるものだから反論ができない。どちらの味方をしたわけではないが、丸沢がいったことは正論である。出席した多数の組合員は丸沢の意見に賛成した。このとき関は周章狼狽^{しゅうしょうろうたい}、しどろもどろで、大変なあわてぶりであったという。だが、これがもつて、関の恨みを買うことになった。

英・関の確執が続くなかで、昭和二十五年、ついに英委員長が解任され、代わって関が委員長に就任する。丸沢に対する攻撃が執拗に繰り返されるようになるのは、その直後からであった。例えば、

「市政府は丸沢らの行動に疑いをもち、近く召喚して取調べることになった」
 などの噂がまことしやかに流された。要するに、関一派は「噂の政治」で丸沢の政治生命を奪おうとしたのだ。しかし、そんなことで沈黙するような丸沢ではない。噂の真偽を確かめるため、市政府に出向いた。いうまでもなく、事実無根というのが回答であった。そこで丸沢は組合執行部に「意見書」を提出するとともに、執行部のあり方を批判して、反省を求めたのだった。

ところが執行部はこれを逆手に取った。丸沢常哉の「意見書」を彼らは「丸沢書簡」と呼んで、「分派活動」と断じたのだ。おりから中国では反革命鎮圧運動が猛烈となり、勢いにのった関ら執行部は、当時甘井子^{かんせいし}で組合を思うがままに動かし、権勢を振るっていた斉藤清なる男と結び、反対派を次々に弾圧していった。極左派の弾圧の嵐は子供たちが通う学校にまでおよんでいった。彼らは反執行部と目される組合員の子弟に対して五、六時間もの間直立不動の姿勢で立たせ、両親を監視していちいち学校に報告せよと威嚇した。

そのなかには、科学研究所の井爪や萩原の子弟も含まれていた。この暴拳を耳にした丸沢は萩原にすすめて事実関係を董農所長に報告させている。それでも、丸沢に対する攻撃はさらにエスカレートしていった。集会で「丸沢を銃殺せよ」などというスローガンが叫ばれたのもこのときのことであった。

だが、丸沢は毅然として一歩も引き下がらなかった。福田がいうように奥地ならば「確実に殺されていた」というのは、決して誇張ではなかった。

あとでわかったことだが、最大のガンは甘井子の斉藤だった。どうやら関は斉藤に自由自在にあやつられているロボットのようでもある。丸沢攻撃は執拗だっ

た。たまりかねた丸沢は、自分に対する調査を行うように、当局に要請している。

当時の状況からすれば、これはまさしく命をかけた「調査要請」であったに違いない。さっそく、工業部から人を呼んで、当局は調査に入った。その結果は、「丸沢にはなんらの過失もない」というものだった。その直後、関委員長は科学研究所に丸沢を訪ねて、批判の行き過ぎを謝罪している。

かくて昭和二十八年三月下旬、すでに帰還第一組が招待所に結集した直後、市政府の公安局長が主催する会議に招集がかかった。科学研究所からは、丸沢のほか浜井、萩原が招かれた。この日集まったのは、いずれも執行部の弾圧に屈せず、長期にわたって抵抗を続けてきた人々である。

市政府当局も、事態を放置できないと判断したようで、解決に乗り出してきたのだ。それから連日のように執行部との間で会議がもたれ、論争が繰り返された。公安局長の前で論争したこともある。

ようやく解決の糸口が見えはじめたと思ったとき、斉藤清の謀略で、問題は再び入口に戻ってしまった。闘争は継続され、日本人は毎日この問題で集会を開き、退屈どころではなかったと、このころになると丸沢はゆとりすらみせている。

このころから市政府の劉景瀨外僑科長が、丸沢のもとを頻繁に訪れるようになる。それはどうやら組合問題の情報収集に目的があったようだ。

九月に入ったある日、劉景瀨外僑科長が公安局長を案内して、丸沢の家を訪問した。その席で公安局長は丸沢に、二つの問題について、意見を聞きたいといった。一つは中国の科学技術の現在をどう考えるか、第二は組合問題をどう解決するか、だった。

第一の問題については、丸沢は自分の考えを率直に開陳している。だが、第二の問題については、逆に公安局長の意見を聞きたいと迫った。局長はしばらく考えてから、こういったものだった。

「関は愚かであるために、周囲に動かされて過失を犯した。だが、斉藤と麻生夫婦は執行部のガンの存在、彼らを排除しないと、問題は解決しないのではないか」

当局も問題解決を判断した。関委員長はともかくとして、斉藤と麻生夫婦は、執行部のガンであると判断したのだ。

十一月初め、斉藤に対する批判会が開かれた。この批判会は執行部と特定の代

議員だけが出席して開かれたために、丸沢は出席していない。批判会の模様はただちに全組合員の知るところとなった。斉藤の自己批判は組合とは関係のない私行にまでおよび、組合員たちは、その内容に唾然としてしまった。

彼は樺太生まれで、北海道師範学校を卒業し教員生活を送っていたが、実妹と私通して妊娠させたので、逃れて大連に流れてきたというのだ。終戦後、時流に乗って組合運動に参加して、その手腕を認められ、たちまち中央執行委員に選ばれる。

甘井子化学工場の工場長に取り入り、工場長の信任をバツクに組合員に対して暴威を振るったのだ。反対者にはあらゆる方法で、弾圧を加え、服従せしめた。彼は驚くべきことに、その権力を使って、甘井子化学工場の技術者の妻で、組合運動の積極分子といわれた二人の人妻と肉体関係を結んでいたことも自己批判のなかで自己暴露している。

不幸にして世のなかでは、えてしてこういう陰謀家が権力を握るようになるのである。丸沢が偉いのは、彼らが権力の絶頂に達したころ、誰も彼らの報復を恐れて、沈黙を守っているとき、毅然とした態度で、正邪を明確にする戦いを挑んだことだ。そして科学研究所の多くの科学者たちも、彼らに頑強に抵抗したのである。

帰国直前の大陸奥地勤務

昭和二十八年十一月、組合問題が解決すると、在連日本人に対して、中国側は新しい勤務先を発表する。組合問題はあまりにもこじれてしまった。まだ、感情的なしこりも残っている、冷却期間をおいてから帰した方がよい、と中国当局は判断したようので、大連在住の日本人はいずれも、奥地に分散勤務ということになった。

丸沢常哉は四川省長寿県の化工廠（化学工場）に転勤を命じられ、また、萩原定司はこのとき、南京の化学工場に転勤を命じられている。丸沢は帰還の直前、それまで苦楽をともにした中央試験所の技術者たちと別れをつけ、一人四川省長寿県の小さな化学工場で、技術顧問として働くことになる。

新任地から出迎えるため派遣された案内の人にともなわれ、丸沢が中国大陸の奥地に旅立つのは、昭和二十八年十二月二日の深夜のことであった。

それまで大連に残っていた中央試験所の技術者は丸沢を含めて十名。各々は八ヶ所に分散勤務することになったのだ。

十二月二日夜大連駅発の特別列車には、同じく中国の奥地に向かう数人の技術者が乗っていた。列車には丸沢常哉のほか関皓之、小田憲三などの姿があった。

山峡の船旅を経て、新しい任地に到着したのは十二月の十五日のことであった。丸沢常哉に途中まで同行、さらに奥地の重慶に向かう小田憲三らと別れを告げた。そのときのことを小田はこんなふうにいっている。

「長寿というのは重慶に接している県ですが非常に寂しいところです。私たち大部分のものがまだ船に乗っていくというのに、十数家族の日本人、これは発電所と化工廠にいく組ですが、別れて降りていかれたときのあのときの気持は、今でも忘れることができません。あのとき聞いた話では、バスも車も通らないところだったのです。先生が重慶で私が長寿だったらよかった、と私はあのとき思ったものでした」

丸沢常哉の新しい勤務場所は、小田の話にもあるように、険しい山間部にあつた。すでに七十を超えた老科学者は、背中に荷物を背負い、同僚たちを励ましながら、坂道を喘ぎ喘ぎ新しい職場に急いだのである。

そこは塩素酸カ力を製造する軍需工場だったが、また、日本人には耐え難い気候の地であつた。宿舎は統一規格の建物で、床板は張っていない。一年を通じて曇天か雨天。その上に夏の猛暑は言語を絶した、と七十を超えた老科学者は悲鳴をあげている。

丸沢の立場は「生産技術科付き」ということである。与えられた仕事は「原料に含まれる不純物の除去」というものだった。丸沢は問題解決のため、文献の調査を始める。といつても田舎の工場のこと、参考文献の入手は困難である。

こうしたなかでも、丸沢は中国の若い技術者に化学の基礎を教えたり、工場を見て回っては、問題点をまとめ報告書を提出したりもしている。青年との淡い交流を、抑えた筆致で彼は著書のなかに書いている。

「この工廠に孫静珉という二十四、五歳ぐらいの青年がいた。四川大学化工系の卒業生で少年時代を満州の開原市で過ごした由で、たどたどしいがこの工廠で日本語を話せる唯一の存在であつた。孫君はほとんど毎日私を訪ね、科学技術上の問題について質問した」

丸沢常哉はここでは、教育者としての役割も果している。向学の情熱に燃える中国の青年を相手に、科学技術の基礎からその将来はどうなるかなど、飽きることなく熱心に話している。青年との淡い交流はまた、故国日本から遠く離れて暮らす丸沢には、一つの慰めでもあったようだ。

一方、南京化工廠に配属となった萩原定司は、工場長から日本の重要な文献を翻訳してもらえないか、との依頼を受けて、人民日報がようやく読める程度の語学力しかなかったけれど、語学の勉強をしながら懸命に文献の翻訳と整理にあたっている。

南京は丸沢が過ごした長寿とは違って大都会である。生活に不便を感じるようなことはなかったが、南京市民は戦争中に未曾有の被害を受けた。日本人に対する感情は厳しかった。萩原も南京派遣と聞いて身の引き締まる思いがした、と話している。それでも萩原は、子供たちを普通の中国人の学校に通わせている。

萩原が南京化工廠での留用を解かれ、祖国日本に帰還するのは、昭和二十九年十二月のことであった。帰国後、直ちに日中経済関係の促進に挺身することになる萩原だが、それ以来、南京化工廠の消息は途絶えていた。その南京化工廠に萩原は、昭和五十四年に再び訪れている。

二十五年前とはすっかり様変わりはしていたが、幾人も懐かしい顔があった。当時の総工程師は、今は南京化工局の副局長になっており、また、親しく仕事をしていた当時の技術科長は、総工程師に出世していた。萩原の訪問を伝え聞いた大勢のかつての同僚たちが集まってきた。かつての若い技師は、手放して歓迎し、萩原との再会に涙を流した。

すべての情報から閉ざされていた丸沢は昭和二十九年十月に李徳全女史が日本を訪問したことを新聞で読み、帰国の近づいたことを知る。

報告書の提出が迫っていた。夏季の猛暑は言語に絶した。まるで蒸風呂である。丸沢は半裸体姿で肩や胸に濡れ手拭をあてて軀を冷やしながら、化学工場に残していく最後の報告書を書き上げる。工場側に提出した報告書は百ページほどのノート二冊になった。ただ気力だけで書き上げたのだ。丸沢は精根を消耗し尽くした。丸沢は報告書を提出すると、死んだように一週間の間眠り続けるのだった。

昭和三十年一月、工場長の招きで、日本人一同は廠長室に集められる。そこで内地帰還の決定を知らされるのだ。予期したことはあったが、一同は歓呼の声

を上げた。当時は手記類はいつさい持ち帰りが禁止されていたので、丸沢常哉はいつさいの記録を焼却処分している。

「昭和十九年正月渡満以来今日まで十一年間一日も休まず書き続けてきた日記を焼くのはさすがに忍び難い思いがした。そこでゆっくり時間をかけて再三再四読み返し、重要な事項だけはしかと記憶にとどめるようにして一冊また二冊と灰にした」と丸沢は書いている。

一月二十九日未明、丸沢たちは長寿化工廠を後にした。途中で各地から集まってきた日本人と合流して、漢口から特別列車に乗り二月六日に天津に到着する。天津には雲南、貴州、山西、甘肅など中国の奥地に散っていた日本人が続々と集まっていた。その数は一千名に達していた。

帰国に先立ち、丸沢常哉は北京放送のインタビューに答えている。その内容は電波に乗って、日本にも届いた。当時の新聞は「丸沢常哉氏の次男廣氏は、十二年ぶりに聞く父の声です、とラジオから流れてくる常哉氏の声にじつと耳を傾けていた」と報じていた。

放送は今までと違って、問答形式で行われ、流れくる丸沢常哉の声は、意外にも若々しく聞こえてきた。廣はそのテープを自宅に持ち帰り、家族とともに再び耳を傾けた。

どういうわけで今日までおられたのですか。

私は元来化学をやりました。終戦のときには大連の満鉄中央試験所長をしていました。私は中国人民に対して何とか日本の人民の一人としてお詫びをしたと考え、技術者の同志を募りまして、帰る機会がありました。自ら進んで残ったのです。

日本と中国はどういう間柄になったらよいでしょう。

日本は中国を侵略した。しかし中国人民は日本人に対して少しも恨んでいないのです。むしろ自分のほうから手を差し伸べ、日本と国交を回復するといっている。それだけの度量を持っている。日本の人民がその気になれば、中国と友好はちゃんとできる。

さて、丸沢が天津の塘沽埠頭たんくから興安丸に乗り込むのは、昭和三十年二月十九日のことであった。天津港に集まっていた人々の中には懐かしい顔も見られた。一行総勢九百四十九名を乗せた、興安丸は静かに塘沽の岸壁を離れた。

舞鶴港に到着したのは二十四日。日本の大地は冬でも青かった。丸沢常哉は目を凝らして、十一年ぶりの祖国を見張る。興安丸に近づく一隻のランチを認めた。懐かしい顔だ。確かに佐藤正典だ。それに大島啓治の姿も見えた。丸沢常哉は声をあげようとした。声にはならなかった。佐藤の隣に立っているのは石川三郎だ。

佐藤は待ちきれずに、ランチから甲板に乗り込んできた。二人は手を握りしめたまま、ただ、見つめ合うだけだった。佐藤の目に涙があった。丸沢の頬に一滴の涙が流れた。その日の日本海は冬には珍しくよく晴れ上がっていた。

(つづく)